

福沢諭吉が大隈重信にスタチスチックの仲間らを推薦した書簡について

奥積 雅彦（国立国会図書館支部総務省統計図書館長）

筆者は統計資料館で行う明治 150 年記念事業に関わることとなり、福沢諭吉と大隈重信との交遊関係を調べるなかで福沢諭吉が大隈重信あてに出した書簡の内容が早稲田大学図書館のHP（古典籍総合データベース）で公開されていることを知りました。これまで、この書簡を現代文に書き下ろしたものがなかったため、書き下ろしを試みました。

その過程で、この書簡の理解を深めるため、その背景、人間関係、その時代などを調べる機会に恵まれましたのでその一端を紹介します。

1 明治 12 年 1 月に福沢諭吉が大隈重信あてた書簡

福沢諭吉と大隈重信の出会いは、明治 6 年（1873 年）になります。それまで、お互いに食わず嫌い、犬猿の仲とと思っていましたが、会ってみたら意気投合し親密な関係となったようです。¹

明治 12 年 1 月の福沢諭吉が大隈重信あてた書簡（以下「福沢書簡」といいます。）の内容と現代文へ書き下ろしたものは、別記のとおりです。それによると、福沢は「慶應義塾」塾員ら 13 名を「スタチスチックの仲間」として推薦しています。ほかに、杉亨二、新井金作、呉文聡を「是ハ統計局の人」として書き添えています。これが何のために書かれた書簡であったかははっきりしませんが、当時、福沢諭吉と大隈重信がスタチスチック（統計）に関する事で密に交流していたことがうかがわれます。

ちなみに、この書簡に名を揚げられた 16 名のうちの 13 名は、前年の明治 11 年 12 月に創設された製表社（のちの東京統計協会）の創立メンバーでもありました。西川俊作「統計学—福澤諭吉から横山雅男へ」によれば、この書簡を「製表社…を結成した慶應義塾の「スタチスチックの[研究]仲間」のリストを添えて、政府に統計院を設けるよう大隈重信に懇請した」（最初に指摘したのは横山雅男である）としています。ただ、そのような解釈を裏付ける資料を確認することはできませんでした。大隈から福沢に人材の推薦を依頼し、それを受けて福沢が人材をリストアップしたのがこの書簡であると解することもできると考えられます。

福沢諭吉²(1835~1901)大隈重信²(1838~1922)

¹ 【参考文献】木村毅「大隈重信は語る」20 頁

² 【写真】：国立国会図書館 HP「近代日本人の肖像」

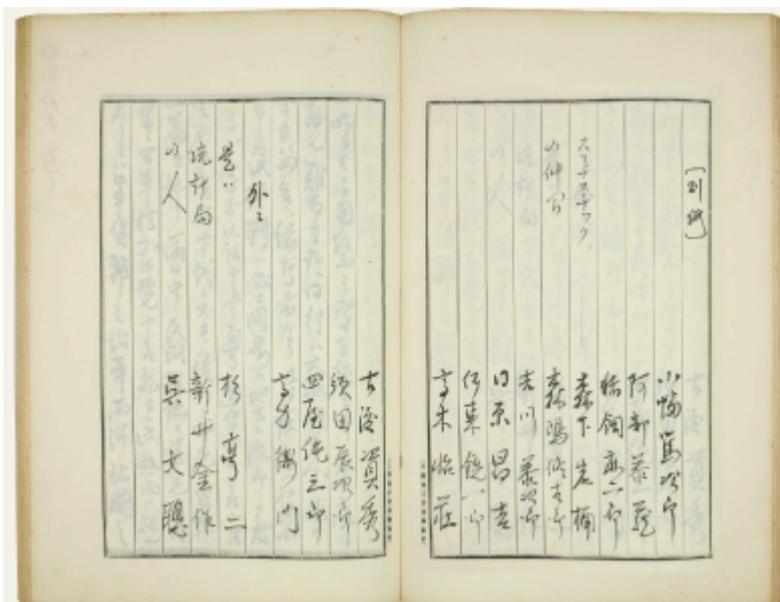
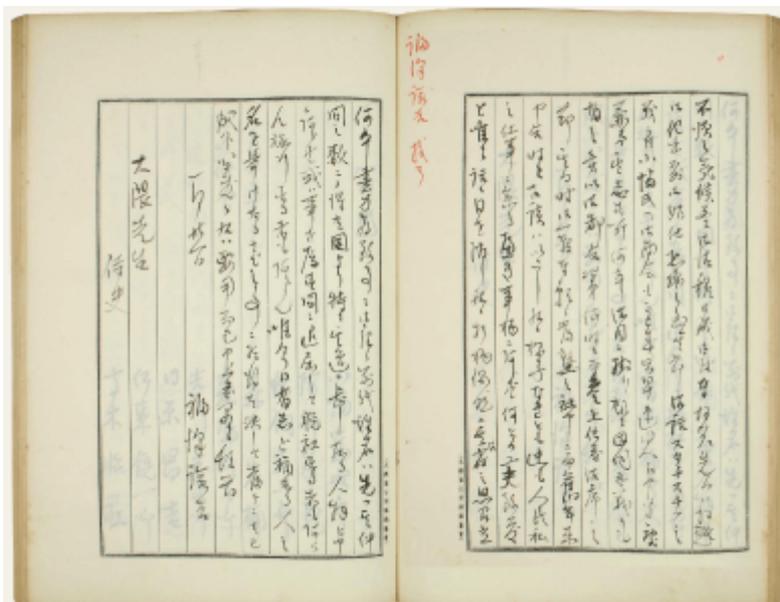
なお、大隈侯八十五年史第1巻（大隈侯八十五年史編纂会、大正15年（1926年）出版）第5章「(4) 国勢調査の嚆矢」によれば、「君^(大隈)は、明治13年^(1880年)初頭の頃、福沢諭吉に向かって、統計の必要について語り、慶應義塾の秀才が、統計研究に力を致すよう希望し、福沢もまた君の意を了として、統計学の進歩に寄与しようとした。蓋し同塾の新人中には統計の必要を知り同志時々会して研究していたものもあったと見える。それらの事は、福沢が君に呈した手紙に明白である。」とされています。

2 福沢書簡の画像

明治12年（1879年）1月の福沢書簡については、大正15年（1926年）の大隈侯八十五年史完成記念資料並遺品展覧会に展示されていたのを横山雅男が発見したとされています。³

また、大隈家が収蔵していた書簡の書写資料については、昭和9年（1934年）に市島謙吉編「大隈家収蔵文書」として出版され、そのなかに福沢書簡も掲載されています。

○福沢書簡の画像



【画像】早稲田大学図書館のHP（古典籍総合データベース）

³ 【参考文献】伊藤廣一「統計歴史散歩」21頁

3 福沢書簡についての雑感

3-1 福沢書簡の年次とその時代

伊藤廣一「統計歴史散歩」21 頁によれば、福沢諭吉が大隈重信あててスタチスチック仲間を推薦した書簡について、「横山雅男は、製表社創立当時の顔ぶれと（書簡の）別紙の顔ぶれとほとんど同じであることから、明治 12 年（1879 年）ではないかと推察しているが、もしそうであれば既に製表社は発足した後であることから、何を大隈に頼もうとしたのかははっきりしない」としています。

また、早稲田大学図書館所蔵市島謙吉編「大隈家収蔵文書」（抄録）下（早稲田大学大学史資料センター編）でも、かっこ書で「明治 12 年」と補足しています。いずれにしても、その年次については「明治 12 年」とする説のみでそれ以外の年次を主張する説は存在していません。

ちなみに、総務省統計局 HP の「なるほど統計学園」によれば「大隈は明治政府の第 4 代大蔵卿（現在の財務大臣）として財政整理に当たっているうちに正確な統計の必要を感じ、統計院の設立を建議し、自ら初代の院長に就任して統計整備の先頭に立ちました。」とあり、大隈が第 4 代大蔵卿であったのは、明治 6 年 10 月 25 日～明治 13 年 2 月 28 日であることから、福沢書簡の「偶然に其御省^{おほしめしたち}之思召立何卒^{なしいたすこと}尽力為致事^{ごさそうろう}に御座候」の「御省」は大蔵省であると推察され、大蔵卿である大隈重信から何らかの協力を求められて、スタチスチックの仲間らを紹介する書簡を発出したものと考えられます。

ここで、製表社の創設の動きをみると、福沢書簡でスタチスチックの仲間の一人としてリストアップされた小幡篤次郎らが中心となり、製表社は明治 11 年 12 月に創設されました（前述のとおり創立当時の会員の多くは福沢書簡の別紙で挙げた義塾出身又はその関係者と一致）。このことを考えると、その著書（「文明論之概略」など）でスタチスチック（統計）の重要性を指摘する福沢の思いを通じて、小幡篤次郎らによる製表社の創設に向けた原動力になったことも考えられます。ちなみに、福沢書簡でも、時候のあいさつの次のパラグラフで小幡の名前が出てきます。

製表社の創設の翌年、明治 12 年 2 月に渡辺洪基、馬屋原彰、小野梓も統計に関する学会を起す企画があり、これを杉亨二に相談したところ、杉はその趣旨は、製表社と概ね同様であることから、協議の結果、同年 3 月 6 日これを合一することに決し、更に委員を挙げて規則案を作らせ、4 月 1 日にこれを議定し、その名称を統計協会（のちの東京統計協会）と改称し、幹事に渡辺洪基、小野梓、阿部泰蔵、矢野文雄、小幡篤次郎の五名を挙げて諸般の事を委任したとされています。⁴

ここで、小野梓は、大隈重信のブレーン（立憲改進黨、東京専門学校（のちの早稲田大学）の創設に深くかかわる）として有名です。また、阿部泰蔵（本邦初の生命保険会社創設者。日本ではじめて統計処理により算出される予定死亡率などから保険料を導いた近代的生命保険事業として誕生させました。）、矢野文雄、小幡篤次郎は言わば福沢の門下生（慶應義塾塾員）で、このうち、阿部、小幡は、福沢書簡のスタチスチックの仲間としてリストアップされています。矢野は、福沢と大隈の交流が縁で、大隈の宅に来るようになり、とうとう大隈の側近になってしまったとされています。⁵また、矢野は、犬養毅^{いぬかいつよし}、尾崎行雄とともに明治 14 年に設立された統計院（院長は大隈重信）に勤務しました。

このように、明治 12 年 1 月の福沢書簡の後、同年 4 月、製表社との合体による統計協会の設立、明治 14 年 4 月、大隈重信による統計院の設立の建議、同年 5 月、大隈自らの院長就任と展開し、その中で福沢の門下生（慶應義塾塾員）や大隈の側近が深く関わっています。言わば福沢書簡による人材の紹介は、我が国の統計史にとって重要な位置づけにあると言えるのかもしれませんが。

3-2 福沢書簡の年次とその別紙で「是ハ統計局の人」と注記していることについて

伊藤廣一「統計歴史散歩」21 頁によれば、書簡の別紙で「是ハ統計局の人」と注記していること

⁴ 【参考文献】東京統計協会「東京統計協会沿革略誌」

⁵ 【参考文献】木村毅「大隈重信は語る」21 頁

について、統計局ができたのは明治 18 年（1885 年）（内閣統計局）のことであり、明治 12 年は（太政官）政表掛であったことからいささか疑問の残ることを指摘しています。

前述のとおり、大隈重信は大蔵省の立場で、正確な統計の必要を感じ、アメリカのような統計ビューロー（統計局）の組織の創設について福沢に相談していた可能性も考えられます。ちなみに、Bureau について、幕末から明治初期に出版された英和辞書を見ると、調べた範囲では、明治 6 年出版の英和字彙で「局」の訳字が初めて登場しています。

大隈は福沢に統計ビューロー（統計局）の中心的役割を担うことが期待される人材の推薦を依頼し、福沢はこれを受けて「是ハ統計局の人」と注記したのではないかと推察することもできるのではないかと考えられます。

4 大隈の統計院設立構想と統計観

大隈重信は、明治 14 年（1881 年）に統計院の設立を建議し、自ら院長に就任しましたが、その 2 年前の福沢書簡は、大隈の統計院設立構想に何らかの影響を与えたのかもしれませんが。

大隈の統計院設立構想と統計観については、明治 31 年の統計懇話会における大隈の演説⁶から読み取ることができます。それによれば「…熱心なる杉君なりその当時人口を調査して一つ…行ってみようと言うので、試験として甲斐国一國をやったその時の勢いでいけばよほど疾に進まねばならぬ。それから、^{（統計は、）}とても大蔵省ではいかぬ。十分強い権力をもってやらなくちゃどうしても各省各箇でもってやるようなことではいかぬ、何と任じても大蔵省だけではいかぬ、そこで中央に統計院を^{こしら}えて…一つの大きな組織でやるとなったものだから…自分^{（大隈）}の道楽のことには大きなことをやるというので余程攻撃を受けました。しかし、これは決して道楽ではない。…統計院それから会計検査院二つを拵えた。十分中央に権力を集めて行政の整理をこれから行っていこうという企て、政略と真に統計を進歩させようという二つのものが結びついて地位の高いものを拵えた。…」としています。さらに、「…議論で国政をやっていく 政治も社会も学術も悉く議論である、その議論の根拠には何を以てして行くかと云ふと是非一つの学理から拠る所のものがなければならぬ、あるいは漠然たる理想、漠然たる想像これだけでは一向議論の根拠がかたくない、段々議論が進んでいくにしたがって議論を決するものは一つの証拠である、…この問題は何で決するかここに拠るべき統計があるか、ないかである」と論じ、大隈はEBPM（事実・根拠に基づく政策立案）の視点でも統計をみていることは現代にも通用することであると言えます。福沢の著書⁷でも統計の重要性が論じられており、大隈と福沢の統計観については二人の間で共通する部分があったと考えられます。

5 おわりに

福沢書簡の現代文への書き下ろしについては、必ずしも微妙なニュアンスを踏まえた解説を加えるレベルには至らなかった面があることは否めませんが、福沢書簡の大意はある程度理解できました。

福沢書簡からも、明治初期に大隈重信と福沢諭吉の二人の偉人の交遊関係がいかに政府統計の発達のための原動力になったかをうかがい知ることができると思います。

⁶ 統計集誌 第 205 号

⁷ 総務省統計局HP「統計図書館ミニトピックスNo.2」参照

【別記】福沢諭吉が大隈重信にスタチスチックの仲間らを推薦した書簡の解説

原文に筆者がルビ、句読点を付与したもの ⁸	現代文への書き下ろし
<p>不順^{ふじゆんのきこう}之^{ますます}氣候^{ごせい} 益^{よく} 御清穆^{ごせいぼく}被成^{ごさ}御座^{ならせられ}</p> <p>奉^{はい} 拜^が 賀^{たてまつり}。先^{はい} 日^{すう} は 拜^ご 趨^{たし} 御^{ゆつ} 他^つ 出^{まえ} 前^{おき} 御^{また} 妨^げ 仕^{つかまつり}</p> <p>恐^{きよう} 縮^{しゆく} 之^の 至^{いたり} 其^き 節^{せつ} 御^ご 話^わ スタチスチック^{スタチスチック} 之^の 義^ぎ に</p> <p>付^つ、小^{せう} 幡^{ばん} 氏^し へ 御^ご 面^{めん} 会^{かい} も 可^な 被^さ 成^る 旨^{むね} 早^{はや} 速^{すみ}</p> <p>同^{どう} 人^{にん} 江^え 申^{まう} 聞^し 候^{きき} 処^{ところ}、</p> <p>兼^{かね} 而^て 其^{その} 志^し す 所^{ところ} 何^{なに} 卒^{そつ} 御^ご 目^め に 掛^か り 様^{よう} 々^々 伺^{うかが} 度^{たぎ}</p> <p>義^ぎ も 有^{あり} 之^の、旁^{かたがた} 以^{もって} 御^ご 都^と 合^が 次^じ 第^{だい} 何^{なに} 時^{とき} に 而^{しかして}</p> <p>参^{さん} 上^{じやう} 仕^{つかまつり} 度^{たく}、御^ご 序^じ 之^の 節^{せつ} 其^{その} 日^{にち} 時^{とき} 御^ご 一^{いつ} 報^{ほう}</p> <p>奉^{ねが} 願^{いた} 候^{まつり}。</p> <p>当^{たう} 塾^{じゆく} も 之^の 社^{しゃ} 中^{ちゆう} に 而^{しかして} 旧^{きゆう} 年^{ねん} 来^{らい} 申^{まう} 合^が 時^{とき} 々^々 相^あ 談^{だん} は</p> <p>いたし 居^{おり} 候^{そうろう} 様^{よう} 子^す なれと、逆^{とて} も 人^{にん} 民^{みん} 私^し 之^の 仕^し</p> <p>事^じ に 参^ま る へ き 事^じ 柄^{へい} に あら ず。</p> <p>何^{なん} と か 工^く 夫^{ふう} 致^{いた} 度^{たく} と 唯^{ただ} 々^々 話^わ に 日^{にち} を 消^お し 居^{おり} 候^{そうろう}</p> <p>折^{おり} 柄^{がら}、偶^お 然^ぼ に 其^{その} 御^ご 省^{しやう} 之^の 思^{おぼ} 召^{しめ} 立^{たち} 何^{なん} 卒^{そつ} 尽^{じん} 力^{りき}</p> <p>為^な 致^{いた} 事^じ に 御^ご 座^ざ 候^候。</p> <p>別^{べつ} 紙^し 姓^{せい} 名^{めい} は 先^{まづ} つ 其^{その} 仲^{ちゆう} 間^{かん} 之^の 数^{すう} に 候^{そうら} 得^へ 共^{ども}、</p> <p>固^{もと} より 特^{とく} に 其^{その} 道^{だう} に 長^{なが} したる 人^{にん} 物^{ぶつ} と 申^{まう} に あら</p> <p>ず、或^{ある} は 事^じ を 為^な す 間^{かん} に 退^{たい} 屈^{くつ} して 脱^{だつ} 社^{しゃ} する 者^{もの}</p> <p>も あらん、旅^{りょ} 行^{こう} する 者^{もの} も あらん。唯^{ただ} 今^{いま} は 有^あ り</p> <p>志^し と 称^{しょう} する 人^{にん} 之^の 名^な を 挙^あ げ たる まで 之^の 事^じ に</p> <p>候^{そうら} 得^へ 者^ば、決^な して 当^{あた} て に 者^{もの} 被^な 成^さ 下^{くだ} 間^ま 敷^{まじ} 候^{こう}。</p> <p>右^{みぎ} は 要^{よう} 用^{よう} 而^{のみ} 已^{もう} 申^し 上^{あげ} 度^{たく}。</p> <p style="text-align: right;">早^{とん} 々^{しゆ} 頓^{とん} 首^{しゆ}</p> <p>(明治十二年) ⁹ 一^{いつ} 月^{げつ} 卅^{じやう} 一^{いつ} 日^{にち}</p> <p style="text-align: right;">福^{ふく} 澤^{ざく} 諭^{ごん} 吉^{きち}</p> <p>大隈先生侍史</p>	<p>(時候のあいさつ)。</p> <p>先日は外出前に急に訪問し恐縮です。そのときお話のあった、スタチスチックのことに、小幡氏へ面会すべく、早速、その旨、同人へお聞きしているところ、</p> <p>かねて、その志すところ何とぞお目にかかり、様々、伺いたいこともあります。どっちみち、御都合つき次第、その日時をついでの節に御一報願います。</p> <p>当塾もこの社に対して、こうして何年もの間、時々相談していますが、とても、一般人の私が参上すべき事柄ではありません。何とか工夫いたしたいと、ただただ、話に日を消化していた折、ふとしたことから、御省（大蔵省）の思いに協力できることになりました。</p> <p>別紙にあげた姓名は、まず、その（スタチスチックの）仲間ではありますが、もとより、その道に長けている人物と言えるものではなく、あるいは、事をなす間に退屈して脱社、旅行するものもいます。ただ、今の段階では、有志と称する人の名をあげたまでありますので、決して当てにしないでください。とりあえず用件のみ申し上げます。</p> <p style="text-align: right;">早々頓首</p> <p>(明治十二年) 一^{いつ} 月^{げつ} 三^{さん} 十^{じゅう} 一^{いつ} 日^{にち}</p> <p style="text-align: right;">福^{ふく} 沢^{ざく} 諭^{ごん} 吉^{きち}</p> <p>大隈先生侍史</p>

⁸ 【資料】早稲田大学図書館HP（古典籍総合データベース）

⁹ 早稲田大学図書館所蔵 市島謙吉編「大隈家収蔵文書」（抄録）下（早稲田大学大学史資料センター編）では、日付について、かつこ書で「明治12年」と補足している。

<p>[別紙] 10 スタチスチックの仲間 小幡篤次郎 阿部泰蔵 猪飼麻次郎 森下岩楠 森嶋修太郎¹¹ 吉川泰次郎 日原昌造 伊東銓一郎¹² 高木怡荘 古渡資秀 須田辰次郎 四屋純三郎 高力衛門 外ニ 是ハ統計局の人 杉亨二 新井金作 呉文聰</p>	<p>[別紙] (略)</p>
---	----------------------

¹⁰ 福沢書簡の別紙に名を揚げられた 16 名のうちの 13 名 (杉亨二、阿部泰造、新井金作、吉川泰次郎、日原昌造、高力衛門、森下岩楠、須田辰次郎、猪飼麻次郎、伊藤銓一郎、森嶋修太郎、小幡篤次郎、四屋純三郎) は、前年の明治 11 年 12 月に創設された製表社の創立メンバー

¹¹ 日本統計協会年譜 (50 頁) の表記は、森嶋修太郎

¹² 日本統計協会年譜 (50 頁) の表記は、伊藤銓一郎